

令和 7 年度 第 3 回学校運営協議会 報告

1 日 時 令和 7 年 11 月 6 日（木）午前 9 時 30 分から 11 時 30 分まで

2 会 場 本校 会議室

3 出席者等

(1) 学校運営協議会委員

【委員①】元特別支援学校長（地域コーディネーター）

【委員②】中村町自治会長

【委員③】本校 P T A 会長

【委員④】あおい中村町

【委員⑤】ありんこの里副管理者

【委員⑥】大里生涯学習センター長

【委員⑦】小糸製作所人事部企画課

(2) 校内教職員

校長、副校長、事務長、各学部主事、地域支援部長、教務・情報課長、研修課長

4 会議次第

(1) 開会

(2) 校長挨拶

(3) 前期の学校経営についての報告

(4) 共生社会を生きるためのコミュニケーション力を育む教育活動についての協議

(5) 学校応援活動

(6) 閉会

5 協議等内容

(1) 校長挨拶

- ・ 11 月 8 日に学習発表会が予定されている。2 歳児がこの学習発表会で保護者と一緒に初めてステージに立つ経験をする。幼稚部や小学部の子どもたちは劇、中学部の生徒は太鼓の演奏をそれぞれ自分の得意なことや学習してきたことを発表に盛り込みながら行っている。毎年継続的に取り組むことで、表現力が身に付き、人とのコミュニケーション力に繋がっている。
- ・ 1 週間後にデフリンピックが開催される。11 月 4 日に本校卒業生の酒井選手が来校し、子どもたちがエールを送った。小学部の 5、6 年生は中村町の「よんもくカフェ」でデフリンピックについて学習したことを地域の方々に伝えたり、通級生も選手からメッセージをもらったりする活動を行った。子どもたちは自分と同じ境遇で、世界で戦っている卒業生と直接関わり、体験的に学ぶ重要性を感じた。またデフリンピックの取り組みは全国の聴覚特別支援学校でも行われている。県内の沼津校、浜松校でのデフリンピックでの交流事例についても紹介された。
- ・ 昨年の 11 月に教育委員会で「今後の聴覚特別支援学校の在り方」について聴覚障害者協会に意見を求めた。また、今年度「共生・共育」（静岡県版インクルーシブ教育システム）の在り方について共生社会を目指すために特別支援学校がどのような役割を果たせるのか、今後 10 年間の計画が出された。通常の幼稚園、小学校、中学校、高等学校の中で障害のある子どもたちへの支援について特別支援学校がセンター的機能を発揮して、役割を果たしていくことが明記された。本校に通う子どもたちは減少傾向にあるが、教育相談や通級生の子どもたちがいるため、通常の小学校、中学校に通っている子どもたちへの合理的配慮

について本校が関わっていくことが期待されている。この役割を果たすために、教員、保護者、地域社会、専門機関（福祉、医療、労働）との連携が不可欠である。そのためにも委員の皆様は地域と学校がつながり、どのような取り組みで子どもたちを育てることができるのか、積極的な意見をいただきたい。

(2) 協議等

ア 前期の学校経営の報告（学校経営計画の取組状況）

（副校長より、資料を基にアンケートの結果を説明）

- ・ 職員のアンケート結果からどの項目についてもA、B評価が多くなっている。通級や教育相談に関わる質問事項についてはアンケートの回答が不明になっていることもあるが、学校としてコミュニティ・スクールの中の静ろうサポートについては、どのように広めていくかが課題になっている。子どもたちの評価は自己評価をグラフにしている。

（副校長より、各分掌課からの前期学校評価を報告）

- ・ 教務・情報課では、ICT支援員を活用した環境整備や授業づくりの取り組み、「キャリア教育の手引き」を活用した交流及び共同学習の実践、教職員で幼児児童生徒のあらわれを共有し、指導につなげるための共有会を行っている。
- ・ 生徒指導・防災課では、避難訓練や防犯訓練を実施した。犯人の防犯訓練の設定を男女2人組にして子どもたちの予想と変えて工夫したり、発災時に誰もが対応できるように発電機作動訓練を行ったりした。また、各学年の道徳の学習内容を掲示し、道徳教育を中心に人権教育を行っている。
- ・ 健康安全課では、スクールカウンセラーに指導をいただきながら「ストレングスカード」に取り組んだり、2学期に幼児児童生徒全員で行っているボッチャのリーグ戦を行い、学部を超えて子どもたちが関わり合い、身体を動かしたりしている。
- ・ 自立活動課は、月1回希望者で行われている聞こえのことや言語発達、コミュニケーション等の校内での教員研修をしたり、自立活動の基本となる「スキルちゃん」という掲示を幼稚部のトイレにも掲示したりして付き添いの保護者にも読んでもらっている。
- ・ 研修課では、一人一授業研究や講師招聘研修を実施して授業力向上に努めたり、8月に開催された静岡校、沼津校、浜松校合同の夏季合同研修を行ったりした。

（各学部主事、部長より資料を基に説明）

- ・ 幼稚部は、学校間交流をしている中原幼稚園に交流に行き、年少は初めて参加した。教員と一緒に補聴器や人工内耳の説明をしたり、中原幼稚園の運動会で行われる組体操の体験をしたりした。幼い頃から聴覚障害の理解をしてくれたり、本校では体験できないような活動に参加したりすることで交流の意義を感じた。また、スポーツデーでは幼稚部の子どもたちと他学部の子どもたちが子どもたち同士で関わり合う姿にお互いを知っている小規模校の交流ならではの良さを感じた。
- ・ 小学部は、体育で行っているセストボールのようなルール性のある競技で友達との関わりを学んでいる。さらに、学習発表会の中で披露する約3分間のダンスも練習を繰り返すことで踊り続けることができるようになっている。このような体育やダンスを通して体力向上につながっている。また、中学部の卓球大会やデフリンピックに出場する卒業生の壮行会を行い、自分たちで会を運営する経験や壮行会を通して先輩と関わり合うことでキャリア教育にもつながっている。
- ・ 中学部は今年度「共生社会を生きるキャリア教育の充実」に取り組んでいる。中学部の委員会活動の一環で学校管理委員会の生徒が、幼稚部に読み聞かせを行っている。幼稚部の子どもたちが興味をもってくれるように自分たちで読み聞かせの方法を考えたり、休み時間も練習をしたりしていた。また、関東聾学校卓球大会の試合の中で、今まで試合経験のある3年生が、初めて出場する1年生に技術面やリラックスの仕方などアドバイスをする様子が見られた。日頃から1年生と3年生のつながりを生かして部活動に取り組んでいることが今回の大会のあらわれにつながっていると感じた。家族参観会では、和太鼓の演奏

を始めて体験する小学生の通級生に和太鼓の演奏の仕方をどのように教えたらいのか考えて、交流を深めた。

- ・地域支援部の乳幼児教室では学校での学びを家庭につなげるため、調理や買い物などの活動を設定している。誕生日会の場面で五感を使いながら体験的な学習を行った。また、保護者学習会を行い、「話し掛けの10か条」や言葉の育ち、子どもとの関わり方について振り返る機会を設定し、保護者のニーズに合わせて学習会の内容や時期を工夫して、家族皆で理解を深める内容を設けた。また、センター的機能の推進及び関係機関との連携として先方からの依頼を受け、難聴理解啓発のために市内の小学校4年生の総合的な学習の時間に交流を行った。本校小学部5、6年生とオンラインでつながって自己紹介をしたり、学習の内容を紹介したりして、聴覚障害について理解を深める機会となった。委員の竹内さんにも協力していただき、先輩の話聞く会を設定した。先輩方が今までの自分の経験をもとに学生時代に身に付けておくという良いことや進路等、様々な話をしてくれて、子どもたちや保護者、教員も参考になった。

イ 委員からの感想等

- ・児童、生徒、保護者の評価の表の読み取り方について知りたい。【委員①】
(副校長) 黒塗りは幼稚部、斜線が小学部、×印が中学部の評価になっている。0、1、2、3は子どもたちが自分の成長の評価をシールで表したものである。「できた」が3「まあまあできた」が2、「頑張りたい」が1になっている。
- ・中学部の読み聞かせは相手への伝え方を考える力が身に付くと感じた。卓球大会の様子から日頃の生徒同士のコミュニケーションの積み重ねや信頼関係を感じた。【委員④】
- ・10月に中村町の公民館の「よんもくカフェ」で小学部の5、6年生がデフリンピックのことを紹介してくれた。静ろうサポーターとして花壇の活動にも参加した。また、10月に本校の体育館で中村町のお祭りを行った。災害の際に避難所となるため防災の展示をしたり、学校の紹介をしたりしてお祭りの中で学校と地域との交流の場となった。【委員②】

ウ テーマ「共生社会の担い手」を育む学校づくりのために地域社会との協働について

- ・第2回の運営協議会でいただいた委員の方々の意見をAI分析でまとめた資料を提示しながら協議のテーマを説明した。
- 聴覚特別支援学校から社会に出ていくために必要な力について。
- ・12月頃に中学部3年生と進路に向けた学習で地域の方々との交流会を行う予定である。生徒たちがどのような交流を望んでいるか。【委員②】
(中学部主事) 中学部は少人数のため、様々な価値観に触れたり、様々な世代の方から生き方を教えていただいたりする機会にしたい。また、地域の方々の学生時代の話や今の中学生に期待することを伝えてもらいたい。
(校長) 中村町のお祭りに学区外の子どもたちも参加していた。本校の子どもたちが参加し、参加している様々な方と交流するなど、お祭りでコミュニケーションを取る場にできると良い。
 - ・子どもが企画をし、企業やお店とコラボして商品開発や販売するような活動ができるのではないかと。小学校の福祉の学習で、難聴の子どもたちと実際に関わる活動はとても良いと感じた。災害時の時のことを考えて、自分の住んでいる地域の避難訓練やお祭りに参加し、地域の方とのつながりが大切にしてほしい。【委員⑤】
 - ・10月26日に大里中学校と保健福祉センター、生涯学習センターで合同で行われる「大里フェスティバル」があった。様々な人と交流したり、経験を増やしていったことが子どもたちの成長につながると感じた。主催者としては、イベントに多くの方に参加してもらうためには、地域で日程が重ならないように調整していきたい。11月7日か

らの歴史ボランティア育成講座や1月25日に実施されるカルタの大会等の紹介があった。【委員⑥】

- ・聴覚障害の方も様々な障害の程度があるが、コミュニケーションをどのように取るか、自分で工夫をしている。紙やペンを職場で用意したり、作業をするときには障害ある無しに関係なく、作業手順書を活用したりしている。課題としてあるのは、安全面で何か危険があったときの情報をどのように取るか、現在はアラートやランプ等で表示しているが、環境を整えていきたい。また、困ったときや分からないときに自分から聞く力が必要であり、行政のサポートセンターとも連携している。【委員⑦】
- ・社会に出たときにろう者は健常者とのコミュニケーションの壁を感じて離職してしまうことがある。小学部のように市内の小学校と関わるのが大切だと思う。ろう学校は教員が通訳してくれるので、障害者意識が強くなると感じる。しかし、社会に出ると通訳してくれる人はいないので、自分でやっていく力が必要である。放課後デイサービスを利用している子どもたちと一緒に遊ぶのも良いのでは。【委員④】
- ・現在、娘が月1回卒業後に通う学校に行っている。学校まで行くのに、親が付き添っているが、通学中に何かトラブルが起きたときに自分で対応できる力を身に付けていく必要がある。日頃から地域とのつながりは薄く、近所の人あまり知らないなので、情報を取るようにしたい。【委員③】

エ 協議のまとめ

(協議終了後、委員の方々の意見と資料をもとに生成AIを使ったまとめを共有した。)

- ・子どもたちが将来、社会で自立するために必要なコミュニケーション力を育む具体的な方法として、地域との協働による「リアルな体験」の重要性が繰り返し強調された。中村町のお祭りの参加や地域が提供する講座等、具体的な機会の実現を向けて、学校と地域がどのように連携を進めていけるかを考えていきたい。

(3) 学校応援活動について

- ・学習発表会(11/8)や4人の卒業生も出場するデフリンピック(11/16開幕)について紹介し、委員の方から応援メッセージをいただいた。

(4) 次回の学校運営協議会について

- ・第4回の学校運営協議会は1月29日(木)を予定している。